



国盗り物語

後編

—織田信長—

司馬遼太郎



新潮社

国盗り物語 後編

——織田信長

昭和四十二年八月十日 発行
昭和四十七年九月二十日 二十四刷

定価 六〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(260)一一一(大代)

振替 東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本所

© by R. Shiba

国盗り物語

(後編)

織田信長

三 助

おかしな若君だった。

幼名は吉法師、名乗りは信長、というりっぱな呼称がありながらも氣に入らず、自分で、

「サンスケ」

という名前を勝手につけていた。サンスケ、などといえ
ば、いなかできびきびして、喧嘩とあれば水っぱなを
かなくすりすて、尻端折って駆けだしそうな名前であつた。
ひどく軽やかで、こきみがいい。

「サンスケだぞ。汝らもわしをサンスケ様とよべ」

と命じていた。

われはサンスケなり。

と勇みだちながら、城外で村童をあつめては石合戦をし
たり、水合戦をしたりした。まったくのところ、

「サンスケ」

という語感のなかにこそ、この少年の、

——われはこうありたい。

というえたいの知れぬ美意識が籠められていた。この自

称の名については、ある日父の信秀は、

「吉法師、そちは自分のことをサンスケとよべと言つてい
るそうだな」

ときいた。

ふむ、と少年は白い眼でうなずいた。信秀は笑いなが
ら、

「サンスケ、とはどう書く」

といった。少年はだまって地面にしゃがみこみしばらく
考えていたが、やがて、

「三助」

と枯枝で書いた。足輕にさえこんな名前の者はいないで
あるう。せいぜい雑人の名前である。

「その名が好きか」

「好きだ」

と言うようにうなずいた。余談だが、この少年はこの名
前がよほど氣に入っていたらしく、長じてから次男信雄
(のち尾張清洲城主、内大臣) がうまれたときに、三介と名づ
けた。名前といえば信長は自分の子供の名もこの男らしい
傾斜を帯びたものをつけた。長男信忠は「奇妙」といい、
三男信孝は「三七」といい、九男の信貞にいたっては、
人、という名だった。

尋常でない、傾いた美意識のもちぬしなのである。

服装、行動、日常生活のすべてが、尋常でなかった。服
装などにしてもいっさい自分で考えたもので、このサ
ンスケのあたまには、「世間では普通こうなっているから」

とか、「それが慣例、習慣だから」というような常識感覚でその服装を身につけることはなかった。平素、山賊の子のようなかつこうをしている。小袖はいつも片肌をぬぎ、下は小者のはくような半袴をつけ、腰のまわりに、小石や火打石を入れた袋を五つ六つぶらさげ、大小は品のわるい朱鞘をさし、まげは非人のような茶筥^{ちやく}まげで、元結は真赤なひもで巻いていた。なるほど織田の若殿にすれば奇妙奇天烈な服装かもしれないが、ひどく身動きにべりないデタチなのである。鞘といい元結といい、燃えるような赤を好んだのは、この少年のやるせないほどに鬱屈した自己を、そういう色で表現しているのであらう。こうしたこの少年の精神をどういふ言葉でいいあらわせばいいのである。ない。無いながらも言うとするれば、前衛精神という意味あいまいの言葉を適用する以外に手がない。

が、少年自身、こういう奇矯な服装をして奇をてらっているわけではない。てらって自己を押しださねばならぬほど、かれはひどくい身分のうまれではない。尾張の織田家という堂々たる貴族の御曹司で、どんなに平凡な服装をしていても、たれからもちやほやされる身分の子であった。

この少年は、野あそびするにしても、村童^{むらどう}といっしよに泥まみれになってあそんだ。自然かれの近習^{きんしゆ}の少年もかれといっしよに泥まみれにならなければならなかった。

城下の町人や百姓たちは、この少年が通ると、目ひき袖ひきしてうわさした。

三助^{さんすけ}のは、鴨の子か

水鳥か

ときどき川の

瀬に落ちやる

そんなふう^うに唄^{うた}われていた。

城下を歩くにしても、異風であった。歩くときは近習の肩にぶらさがって歩き、歩きながら、瓜や柿などを食べた。町なかで一人立ち、夢中で餅に嚙みついているときもあった。

そういうこの少年を、家中の者も城下の者も、

「うつけどの」

とよんだ。馬鹿か狂人かにしかみえなかったであらう。

御守役の家老平手政秀からして、

（この若殿が世をお継ぎなされるときには、織田家はほろびる）

と真剣に考えていた。かれが「美濃の蝮」の愛娘^{あいむすめ}をもらって信長の配偶者にしようとおもったのは、単に織田信秀と斎藤道三の和睦を意味しているだけではなかった。ゆくゆくあの蝮めの実力によって信長をまもり立てて行ってもらいたい、という遠い計画によるものであった。

それほど馬鹿だった。

ある年、忽然^{こつぜん}とこの少年が尾張から掻き消えてしまったことがある。さすがに平手政秀を心配させてはかわいそうだとおもったのか置き手紙して、

「爺、しばらく巡礼に出る」

と書きのこし、出奔した。あとで気づいて政秀はあやうく気絶しそうになるほどおどろき、主君の信秀の耳にだけ入れた。信秀はちよつとびっくりした様子だったが、すぐ、「そうか」と笑いだした。

「おかしなやつだから、なにかとくべつに思うことがあるのだらう。ひろく世間を見ておくのもわるくない。このことは家中にも知らせるな。近習の者たちにも口止めしておけ」

若殿ひとりで出奔した。ということが隣国にきこえたりすると、少年の身が危険だからである。

「こんどお帰りあそばしたとき、いちど、御父君の口から御説諭くださりませぬか」

「わしは吉法師の守役ではないぞ。単に父親にすぎぬわ」
「しかし」

「守役はそちにまかせてある。よきようにせよ」

と信秀はとりあわなかった。信秀はそんな風変わりな父親だったが、しかしかといつてこのうつけどのをすこしでも理解している人間といえ、広い世間で信秀がただひとりかもしれない。か。

(あれは天才かもしれない)

と信秀はひそかに思っていたふしがある。

信長は道をいそいで上方に出た。

供はいえ、中問ひとりである。この男にムシロを一

枚、荷俵を一つ背負わせてあり、どうみても流浪の少年の姿である。

京を見物し、摂津にくだった。

摂津の浪華というところに多少の人家があり、とうもなく巨きな寺があった。

四天王寺であった。

信長はその四天王寺に詣ると、その堂舎の軒下で牢人らしい男が四、五人群れて、なにやら文字を壁に書きつけては、がやがやと議論している。

(なんじゃ、あれは)

と近づいてみると、侍としての名乗りはどんな名前がよいか、ということを議論しているのであった。みな、気に入った名前をつけようとしているらしい。

「名はだいいなものだ」

とおもだつひげづらの男がいった。ひげづらはずいぶん文字の種類を知っていて、さまざま名乗りを壁に書いていた。頼定、義政、清之、興長、公明、道正、宗晴、忠之、などの名が書かれている。

ふとその壁をみて、少年はおどろいた。ひとときわ大きく、「信長」

と書かれているではないか。文字の組みあわせからいってめずらしい名乗りであったが、とにかく信長という名乗りは父親が自分につけてくれたものであった。

(であるのに、あんな素人牢人につけられてたまるものか)とおもい、奪ってやろうと思った。供の中間に口上を言

いふくめ、ひげづらの牢人に交渉させた。

「そこな名乗りを」

と、信長の中間がぬれ縁まで進み出、手をあげて壁の一点を指さした。

「手前ども主人に頂戴できませぬか」

「うぬはなに者だ」

牢人は、びっくりしたようである。

「へい、尾張からきた巡礼でござりまする。その信長という名乗りを、手前ども主人に頂戴しとうござりまする」

「主人とは、そこにいる童か」

牢人は声をあげて笑いだし、これはだめだやれぬ、といった。ソノホウナドニハチクトシタル名乗りヨ、といったと、祖父物語にはある。チクトシタル名乗りとは「晴れがましくてもつたいない」という意味だ。しかし中間はそこ

は下郎だから押しふとく、

「いやいや、なにも名乗る、と申しているのではござりませぬ。国のみやげにしたいと申しているばかりでございませぬ」

としつつこくねだった。牢人はふむふむ、とうなずき、「それならばよい。かまえて付けるではないぞ。なにしろこの信長という名乗りは、天下取りか国取りの者の名だ」といった。

これには信長もおどろき、そんなものかと思った。上方からの帰路、みちみちこのことばかりを考えた。いままで、「天下」

ということ考えたこともない。成人すれば父のあとを継ぐ、それだけのことを薄ぼんやり考えていたにすぎなかったが、天下が取れそうだ、という。天下を、である。天下とはどんなものかは実感として目にもみえず指にもさわりにくくてよくわからなかったが、とにかく自分というものが別なものに見えてきたことだけはたしかだった。

信長は、国に帰った。

城へもどると爺の平手政秀はおどりあがるほどによろこび、あとは幾日もかかってねちねちと説論した。勝手に言え、とおもった。そんな叱言を横つ面できいているという点ではいつもとかわらなかったが、頭ではべつのことを考えていた。天下を取るにはどんなことをすればよいか。

(喧嘩につよくなるほうがよい)

というのはたしかであつた。もともと体をうごかして飛びまわることは大すきで、弓や馬術、水練にはとくに精を出してきた。水練はかくべつに好きで、まだ水に入るには寒い三月にはもう信長は連日水中にいたし、毎年九月までは泳ぎまわって暮らしてきた。

(しかし、それだけでは天下はとれまい)

とおもった。取れるような自分を、自分で育ててゆかねばなるまいとおもった。なるほど陣の立て方、戦争のしかた、というものはこの平手政秀が教えてくれている。しかしいつ聴いても信長にとってはあたりまえのことを爺がもったいをつけて言っている、としかおもえず、なんの魅力もなかった。

（合戦のしかたも、おいおい、自分で考えてみねばなるまい）

とおもった。その服装とおなじように、このサンスケと自称する少年は、

「従来こうなっているからそうしなされ」

といわれることが手で、あたまから受けつけられぬたちだった。卑賤の家に生まれればこの性格だけでかれは世に立てぬほどにいじめられたにちがいないが、その点、自分の無理を通せる権門に生まれ、なるほど守役の平手政秀こそ口うるさかったがそれも、わるかった爾今氣をつけよう、とさえ言ってやれば、政秀はよるこんで鳴りやむ。

帰国してから信長は、

「鷹野（鷹狩り）」

をよるこんでやるようになった。いままでこれほどの運動ずきな男が鷹野をあまり好まなかったのは、この集団競技が室町幕府の手でひどく様式化されていたためで、服装、供の人数、役割、その装束にいたるまでなかなかうるさい競技になっていた。

（鳥を獲ればよいだけのものではないか）

とかれはおもふのだが、守役の平手政秀などはその形式にうるさくこだわった。鷹野は天皇、將軍、公卿、親王、諸国にあっては大名の競技である。それにふさわしい様式を持ち、威容をこらさねば人のあなどりを受ける、といって、信長に対し、いっこうにおもしろくもない鷹野を強制した。

（ああいう鷹野は、もうやめた）

と信長はおもひ、別の方法を工夫した。

無用のものはきりすて、実用的なやり方をどんどん加味し、ついには専門の鷹匠でさえとまどうほどの独創的な方法をつくりあげた。

実戦的なものである。まずなにげなしに野に出るのではなく、合戦とおなじように最初に斥候をはなつ。それも一人や二人でなく、二、三十人も放った。これを、

「鳥見の衆」

とよばせた。鳥見の衆は二人で一組になり、遠く野山をかけまわってどこに鳥がいるかを偵察し、鳥の多い場所を発見すると一人は見張りとして現場にのこり、一人がかけてどって信長に報告する。信長はすかさず出動する。

信長のまわりには、戦場における馬廻りの騎士のごとき者が六人、つねに従っている。六人衆とよばれ、半分は弓、半分は槍をもっている。

ほかに馬に乗った者が一人いる。これは現場にちかづくとき、鳥に接近し、そのまわりをぐるぐる乗りまわしながら、いよいよ近づいてゆく。大将の信長はどこにいる、といえ、その騎馬の者のかげにいる。徒歩である。手に鷹をもち、めざす鳥に見つからぬようにいつも馬のかげになり、馬がまわるにつれて信長もまわる。

いよいよ接近するや、

「さっ」

と信長は走り出て鷹をはなつ。

こうやればかならず獲れるということを信長は知った。もっとおもしろいことに、この若者は、現場付近に立たせてある人数には百姓のかっこうをさせておくことであった。服装だけではなく、現実にスキやクワをもち、田畑をたがやすまねをさせるのである。そうすれば小鳥どもは、「あれは百姓だ」

とおもって安心してさえずっている、というわけだった。ふつう、こんな鷹狩りはない。

本来ならば、犬を連れている者でも無文の布衣に革ばかりの鳥帽子をつけ、右手には白木の杖をつき、左手に犬のひもをもつ、というほどの大そうなものだ。百姓のかっこうをして小鳥をだます、などという法は、人皇第十六代仁徳天皇からはじまって以来、かつてないことであった。

殿様のお鷹野

といえたいようなものであったが、信長のそれは浮浪人が喧嘩に出かけてゆくようなかっこうで城を出た。城下の者は、

「まるで乞食の鷹野じゃ」

とあきれた。

一事が万事、そんな若者である。

「やはり、うわさにたがわぬうつけ殿でござりまするな」と尾張からかけもどって美濃稲葉山城で報告したのは、耳次のほか、数人の伊賀者であった。庄九郎——いや、この第二部織田信長編からは庄九郎とよばずかれの現在の名

である斎藤道三とよぶことにしよう、信長がこの物語の中心になるためにそのほうが都合である——は、どの密偵がかきあつめてきた話もおもしろかった。いちいち、大声を出して笑った。あほうのあほうばなしほどおもしろいものはない。

道三は、ひざを打ってよろこんだ。

「鷹野も乞食すがたでゆくのか」

これもおもしろかった。密偵の情報などはその男の器量相応の目でみてくるだけにいかに正確でもしよせんは信じきるわけにはいかないものだ、ということをや道三は十分知りぬいているくせに、

(やはり、白痴なのか)

とよろこんだ。かれの密偵者たちは、信長が考案したその鷹野の方法まではしらべて来なかったのである。

この報告をうけたとき、かれは終日上機嫌であった。夕刻、重臣の西村備後守をよび、

「やはり、婦蝶(濃姫)を尾張にくれてやる」

といい、信長のうつけぶりの逸話を二つ三つ話した。

聞いた備後守は大口をあけて笑った。西村備後守とは、赤兵衛のことである。

「赤兵衛、よい婿どのをもつおかげで、尾張もやがて併吞できそうじゃ。婚儀のことは、できるだけ派手にやろう。

そちは織田家の平手中務(政秀)とよく相談し、よしなに奉行するように」

といった。

忍 び 草

濃姫が父の道三から、尾張織田家との婚約の成立をしられたのは、天文十七年の暮である。

この日のあさ、道三が、

「話がある。鴨東亭^{おうちやう}までそこもとひとりで参らっしゃるよ
うに。わしはそこで待っている」

と、侍女をもって報らせてきた。

鷺山城内でのことである。

このところ道三は稲葉山城は嗣子の義龍^{よしのり}（深芳野^{ふかよし}からう
まれた子。じつは前の屋形土岐頼芸^{とよとよ}の胤^{こと}）にゆずり、自分
は鷺山の廃城を改造してそこを常住の城館^{たかね}としていた。庭
が、みごとであった。わざわざ運河を掘らせて長良川の水
を城内にひき、さらに庭内にひき入れ、それを鴨川となづ
けた。

築山がなだらかに起伏し、その姿を京の東山連峰になぞ
らえている。庭はすべて道三みずからが設計した。

庭ずきの茶人はふつう常緑樹をよろこぶものだが、道三
が設計したこの庭には、桜樹が圧倒的に多い。桜を自然の
すがたでながめるだけが好きなのではなく、建材としても
この男は好きなのである。桜と道三というのは、精神とし

てどういうつながりがあるのであろう。

風がない。

杉戸をあけて濡れ縁に出た濃姫の目に、まっさおな空が
ひろがった。ひたひたと濃姫は濡れ縁をわたってゆく。濡
れ縁を踏む足のつめたさが、むしろころよいほどに暖か
な冬晴れなのである。

濃姫は階^{かみし}を降り、階の下で侍女の各務野^{かみのみ}がそろえてく
れる庭草履に足の指を入れ、庭をながめた。

「まるで桜が咲きそうな陽気」

と、濃姫はいった。

が、満庭のどの桜樹も、濃姫の期待のわりにはひどく不
愛想な姿態で、冬の枝を天にさしのべていた。

「もうすぐ参りましょう、春が」

と、各務野がいった。この侍女は、濃姫の縁談のことを
すでに殿中のうわさで知っている。春が、——といったの
は、桜樹にむかっていったのではなく、濃姫の匂いあがる
ような若さにむかっていったつもりだった。しかし濃姫に
はわからない。当の彼女だけが、自分の運命についてまだ
なにも知らなかった。

濃姫は各務野とわかれ、庭のなかの小径をあるいて鴨東
亭^{うづみだて}へ行った。

四阿である。

父親の道三入道が、あたたかそうな胸服を着て腰をおろ
している。

そばには道三の氣に入りの近習で明智城の世嗣^{よつぎ}明智十兵

衛光秀がひかえていた。

少年のころから道三が実子同然に愛育してきたこの光秀は、すでにおやかな若者に成人していた。濃姫とは、母の小見の方を通して血がつながっている。いとこ同士なのである。

「十兵衛、ちょっとはずせ」

と、道三は光秀にそういった。光秀ははっと頭をさげ、典雅な挙措で後じさりしながらそのすきにちらりと濃姫をみた。

見て、光秀はすぐ視線をそらせた。濃姫の眼と偶然出あったことが、この若者をろうばいさせた。

「帰蝶」

と道三は光秀の去ったあと、その娘をよび名でよんだ。

「それへ腰をおろしなさい」

濃姫はいわれるとおりにした。腰をおろしたあと、なんのお話でございましょう、と問いかけるように小首をかしげた。ひどくあかるい眼をもっている。

「やはり、いとこだな」

と、道三は笑いだした。

「あらそわれぬものだ。眼もとや唇のあたりが、十兵衛に似ている」

なんの、すこしも似ていない、いとことはいえ、ふしぎなほど濃姫と光秀とは似ていないことを道三はつねづね思っている。そのくせ、このようにとりとめもないことを皮切りにいったのは、なんとなくこの父親は気はずかしかつ

たからにちがいない。

濃姫は、去年からむすめになった。そのあとみるみる美しくなり、道三でさえ、この娘と対座しているとふと、まばゆいような、なにかしら顔の赤らむ面映ゆさをおぼえて、眼をそらす瞬間がある。

（生涯に女をずいぶん見てきた。しかし帰蝶ほどに美しい女はいなかった）

そんなときは、道三は父親というよりも、不覚にも男の眼をもって濃姫を見ている。いまもそうだった。

いま、濃姫は腰をおろした。おろすしぐさに腰のくびれが、ふと道三に父親であることを忘れさせた。狼狽のあまり、

「十兵衛に似ている」

などと、あとかたもない妄誕を口走ってその場をごまかした。いや、自分の、うっかり陶然としそうになる心を隠した。

「以前には」

と、濃姫はいった。お父上は逆なことをおおせられまして、そなたはいとこであるのに十兵衛とは似ておらぬ、色の白いところがせてもの通うところか、などと。——そう濃姫は小さな抗議をした。

「はて、憶えぬことだ」

道三は楽しそうにいった。

「そのようなことを以前に申したかな」

「おわすれでございますか」

「こまった。わすれている」

「薄情でいらっしやいますこと。帰蝶はそれが去年の何月の何日だったかまでおぼえております。帰蝶がお父上様をおもって差しあげるほどには、お父上様は帰蝶のことをおもってくださらぬ証拠かもしれませぬ」

「これは」

道三はひたいをたたいて、参ったな、と笑った。この男がこのような軽忽な身ぶりをするのは、この地上では濃姫に対してだけであつた。

「では、言いなおす。そなたも十兵衛も、おさないころには似ておつた。ところがどちらも成人してからまるで似かよわぬ顔かたちになつた。これで、どうか」

「申しわけございませぬ」と、濃姫はうつむいてくすくす笑つた。「おいじめ申したよう」

急に日が翳つた。翳ると、正直なほどに庭の樹々や石の苔が冬のいろあいに一変した。

「話がある」

と、道三は大ぶりに上体をかがめ、両腕をぬつとつき出した。掌をかざして、地面の火桶のうえにあてた。

「わしはそなたがいつまでも童女でいてくれることを望んでいたのに、そなたは勝手にそのような娘になつてしまつた」

「いたしかたがございませぬ」

濃姫は笑おうとしたが、すぐ真顔にもどつた。ひどく真剣な表情になつたのは、はなしが縁談だと直観したからで

あつた。

「あの、お父上様、十兵衛どののもとに参るのでございませうか」

と、口走つたのは濃姫の不覚だつた。

「ほう、そなたは十兵衛が好きか」

道三は意外な顔をした。が、まさかとおもつた。いとこ同士とはいえ、相手は斎藤家のいわば被官の子ではないか。

「いいえ、べつに」

と、濃姫はもう赤くならなかつた。明智十兵衛光秀という聡明で秀麗な容貌をもつた美濃の名族の子を、父の道三が溺愛するほどに愛していることを知っていたから、自然、自分もついそういうことにつられて童女のころから光秀には好意をもっていた。そのうえ、たつたいままでの話題が光秀のことだから、つい口走つてしまったのである。

「べつに、そのようなことでは……」

と、濃姫はおなじことを二度言いかさねてから、はじめて頬に血をさしのぼらせた。正直なことばであつた。光秀を恋うるほど、濃姫はそれほど数多くの接触を父の近習の光秀ともつたわけではなかつた。

「そなたが庶出なら」

と、道三はいつた。つまり側室の腹にうまれた子なら、という意味である。

「下目^{しもめ}のところへやつてもかまわない。しかしそなたは嫡出^{ちやくしゅ}のむすめだ。そのうえ、わしにとつてただひとりの娘で

ある。自然、嫁ぐときはかぎられる。国持ちの大名でなければつりあいがとれぬ」

道三は言葉をとぎらせ、やがていった。

「尾張へゆく」

「え？ 尾張の？」

「織田信秀の世嗣の信長という若者だ。そなたとは、年はひとつ上になる」

大げさにいえば、濃姫の輿入れ準備は、美濃斎藤家をあげてのさわぎになった。道三は家臣の堀田道空という者を奉行に命じ、

「いかほどに金銀をつかってもかまわぬ。できるだけ贅をつくすように」

と命じた。道空を奉行にえらんだのは、まずこの男は茶人で道具の美醜がわかる。さらにこの男は典礼に通じていた。それだけではない。とんでもない大気者で金銀勘定のにがてな男だという評判を買ってとくに名差したのである。道三はこの道空に何度も、金に糸目をつけるな、といった。

道具好きの道空は、

「これは一代の果報」

とおどりがつてよろこび、さっそく家臣を京にやり、蒔絵師、指物師などの道具職人を連れて来させた。

道三には、考えがあった。

（いかほどの入費をかけ、いかほどの贅沢な支度をしても、たかが知れている。織田家との合戦がこれでなくなるのだ）

ということであった。織田信秀が美濃の豊饒な田園を恋い、それをなんとかわがものにするためにここ数年、しつこく合戦を仕掛けてきた。そのつど道三は信秀をたたきつけてきたが、正直なところ、ほとほとわずらわしくてかわぬ。道三にすれば、尾張と喧嘩をしているよりも美濃を新体制につくりかえてゆくことのほうが急務だった。

（隣人に信秀のような精力的な好戦家をもっている。おれの最大の不幸だ）

と道三はおもっていた。そのためにおびただしい戦費が要る。士民は疲弊する。士民というものは疲弊すると、支配者へ憎悪をむける。

（すべて道三がわるい、かつての土岐時代は楽土だった）

とおもうであろう。なににしても織田信秀の戦さずきは道三にとって大迷惑だった。

（それが、この婚姻でおさまる。やすいものだ）

とおもうし、かつ将来への希望もあった。むこの信長とはもうもないうつけ殿だというのだ。信秀が死んだあと、棚からぼた餅がおちてくるように木曾川のむこうの尾張平野は自分のものになるかもしれない。

濃姫は、その外貌に似合わず、反応のはやい活動的な性格をもっていた。

むろん、毎日部屋にいます。母の小見の方の相手をして茶を楽しんだり歌を詠んだりして、たまに庭あるきをするほか、ほぼ鷺山城の奥からはなれたことがない。

しかし、彼女の分身といつていいほどに気に入っている侍女の各務野は、すでに尾張にいる。物売女に化け、信長のいるなごや城の城下や、その父信秀のいる古渡城の城下などに出没して、自分のあるじの婿どのになるべき信長という若者の評判をききまわっていた。

濃姫がそれを命じたのである。まだ見ぬ夫の予備知識を、できるだけ多くもちたかった。むろん重要な目的のある作業ではない。

「ただ、知りたいの」

と濃姫は各務野にいった。好奇心の旺盛なむすめだった。むろん、こういうばあい、まだ見ぬ夫に関心や好奇心をもたぬ娘は地上にいないであらう。ただ濃姫のばあい、他の大名の娘とちがっている点は、それを行動にうつせることだった。

「お父上には内緒よ」

と、各務野に言いふくめた。各務野は宿さがりする、というていで御殿を去った。そのまま尾張へ行った。やがてもどってきた。

「どのようなおひとだった？」

と、濃姫は各務野を自分の部屋につれこみ廊下には侍女に張り番をさせ、たれも入れぬようにしてきいた。

「水もしたたるような美しい若殿でございます」

と、各務野は息を詰めるような表情で最初にそれと言った。なごやの路上で信長を見たという。五、六人の供をつれ、頭には鉢巻をし六尺棒をもち、珍妙な、いわば中間のようなかっこうをして歩いていった。

町家の者にきくと、若殿さまは野犬狩りをなされているのでござりまする、と教えてくれた。各務野ははじめは不用意にも噴き出しそうになったが、よくよく信長の顔をみると、この十五歳の若者は彼女がかつてみたことがないほどに高貴な目鼻だちをもっている。各務野はまずそのことに打たれた。好意をもった。

（なるほど少々、傾いておられるが、あのお美しさならば、姫さまの婿どのとしていかにもお似合いじゃ）とおもった。

そのあとさまざまのうわさをきいてまわったが、正直なところどのうわさもよくはなかった。しかし各務野は好意をもってそれらを解釈した。

自然、それらを総合してみると、かつて道三が耳次に命じて放った伊賀者どもの信長像とはひどくちがったものになった。

「たとえば平曲に出てくる平家の公達のような」

と、各務野はいった。

「お美しい若殿でございます。しかし平家の公達のように柔弱でなく、いかにも武門のおん子にふさわしく武技がお好きでいらっしやいます」

「どのようにお好き？」

「鉄砲をおならいあそばしております」

「まあ、鉄砲などを」

これは濃姫にとつても意外だった。鉄砲というものはまだ新奇な兵器でしかなく、諸国のどの大名にもさほどの持ち数はない。その上、そのような飛び道具を持たされているのは足軽であつて士分の者はいっさいあつかわない。それゆゑ、信長は大名の子のくせに鉄砲がひどくすきで、橋本一巴^{いちぱ}という名人をまねいて夢中で稽古しているという。

「そのほか馬がたいそうお好きで、毎朝馬場に出て荒稽古をなされております。むかし源氏武者は一ツ所でクルクルとまわる輪乗りという芸ができて平家武者はそれができなかったから源平合戦で平家が負けた、というはなしを聞かれ、それならばおれはそれをやる、と申されてひと月ほど馬場でそればかりに熱中なされておりましたが、ついにそれが出来あそばすようになった、といううわさでございます」

「そのほかに？」

「喧嘩がおすきでございます」

「お強い？」

「それはもう。……」

と、各務野は手まねをまじえて語りはじめた。

あるときのことだ。信長が例のかつこうで城外の村へあそびに行ったとき、村の悪童どもが三十人ばかり群れていて口やかましくさわいでいる。

——どうした。

と信長が事情をきいた。村童は、このきたならしい装束の小僧がまさかお城主の若様だとは知らないから、

「隣り村とそこの野で喧嘩をする」

といった。ところが当村の子供はみな臆病で人数はこれだけしか集まらない、という。

「二十九人か」

と、信長はあごでかぞえ、先方はなん人もいる、ときいた。百人は集まっている、と村童のひとりが答えた。

よしおれが勝たせてやる、と信長は供に言いつけて青銭を何挿^さしか持つて来させ、まずそのうちの二割をみなに公平にくばり、

「あとは働き次第で多寡^{たか}をきめてほうびとしてやるぞ。ほうびを多くもらいたいと思えば必死に働け。喧嘩のコツは、やる前におのれはすでに死んだ、と思ひこんでやることだ。さすれば怪我をしても痛くはないし、たとえ死んでもモトモトになる」

と教え、おれが指揮^{しち}をする、と宣言し、かれらをひきつれて「戦場」におもむき、駆けちがい駆けまわってさんざんに戦ったあげくみごとに勝った、という。

「利口なお人でございましょう？」

と、各務野の報告は、道三が知っている信長像とはだいぶちがっていた。

「だけど、それだけのおひと？ 歌舞もなにもなさらないのですか」

と、濃姫がきいた。そういう芸事は、彼女は父の道三、